

数百年のあいだ日常食器として私たちの生活に寄り添ってきた波佐見焼。他の磁器とは一線を画す自由なデザインと色遣いで、独自の世界観を持っている。

この現在の波佐見焼の方向性に先鞭をつけたのが、故・森正洋氏だ。生活雑器にデザインを取り入れることに生涯を捧げた森氏について、その顕彰と著作権の保護などを行う森正洋デザイン研究所の筒井泰彦さん、井手誠二郎さん、古屋伸治さん、向井良久さんにお話を伺った。

——森氏とはどんな人物だったのですか？

**向井さん** この中では井手先生が一番長いおつきあいでしたよね。

**井手さん** そうですね。私は有田工業高校で教師をしていて、焼物と関わっていたのですが、新任として勤務していた頃に森さんと出会った。その頃、森さんは20代後半で波佐見町の長崎県窯業指導所に勤務されていた。長い間、大衆向けに作られてきた波佐見焼にデザイン性を持たせたいと主張されていました。

# 波佐見焼の変革者、 デザイナー 森正洋

——森氏の仕事とはどのようなものだったのでしょうか。

**筒井さん** 昭和35年に第1回のグッドデザイン賞の授与が行われたのですが、そのなかに森さんの作品「G型しようゆさし」があります。

**古屋さん** 50数年前のニューデザインで「G型しようゆさし」と一緒に「ミゼット」や初期の「電気炊飯器」が並んでいました。その中で森さんのしようゆさしは今でも古さを感じさせません。現代でも生き生きとしています。

**筒井さん** しかもこのしようゆさしは今も現役ですから。半世紀を超えても全く古くならない普遍性のある美しさが森さんのデザインにはあるんですね。

**井手さん** 森さんがデザインを指導する時に言っていたのは、第一に生活感だった。たとえば、器を作る時に「食べたことのないものを盛るものは作ってはいけません。実際に食べてみて食べやすい機能的なものをデザインするべきだ」と言っていましたね。

**筒井さん** シンプルでありながら、飽きのこない「道具としての美しさ」を追求。それまで波佐見焼は有田焼に近いものですが、森さんの作品誕生を機に波佐見焼の流れは大きく変わった気がします。



使いやすく美しいものを。

●森正洋（もりまさひろ）

プロフィール

1927年 佐賀県藤津郡塩田町（現嬉野市）生まれ。1945年有田工業高校図案科を卒業。陶芸家松本佩山氏に師事した後、多摩造形芸術専門学校工芸図案科（現多摩美術大学）を卒業する。1954年より長崎県窯業指導所のデザイン室勤務。1956年白山陶器入社。デザイン室に勤務。1960年通商産業省（当時）が認定する第1回グッドデザイン賞を「G型しようゆさし」で受賞をはじめ、第1回国井喜太郎産業工芸賞受章（1974年）、第20回毎日産業デザイン賞（1975年）、イタリア・ファエンツァ国際陶芸展インダストリアル部門金賞（1975年）、スペイン・バレンシア国際工業デザイン展陶芸部門金賞（1977年）など数々の受賞歴を持つ。国際アカデミー会員。また有田工業高校、九州産業大学、愛知県立芸術大学、九州芸術工科大学、石川県立九谷焼技術研究所、多治見市立陶磁器意匠研究所、佐賀県立窯業大学校（年代順）などで後輩の育成にも取り組んだ。通商産業省（現経済産業省）が認定するグッドデザイン賞に選ばれた作品は113点に及ぶ。そのうち、30作品が長年にわたり愛される商品としてロングライフデザイン賞を受賞している。2005年11月永眠。（詳しくは森正洋デザイン研究所のHP参照）



佐賀県嬉野市にある森氏の自宅兼アトリエでお話いただいた

**筒井さん** 「くらわんか碗」を生み出した波佐見焼ならではの。白山陶器以外にもたくさん作品を生み出している、無印良品の食器や初期のリンガーハットのどんぶりなども森さんが手がけている。また、波佐見を飛び出して、多治見などでも作品を残していますよね。

**井手さん** 「僕は陶芸家ではなくデザイナー」というのが口ぐせでしたが、陶芸作家以上に、土や釉薬、絵の具などの研究にも余念がなかった。

**古屋さん** 釉薬や磁器の原料の調合にも試行錯誤されていました。釉薬に別の釉薬や素材を入れると変わる肌合いをアレコレと試作しながら、必ずコストを計算されていたのが印象的でしたね。

**井手さん** 作品を評する際に「皮膚感」という表現をよく使われていました。使いやすさと生活感、そして美しさが同居する独特の美的表現



スケッチブックにはラフデザインの他に様々な書き込みがされている



アトリエは2005年に森氏が亡くなったままの状態で見られている

なのでしよう。

**筒井さん** 亡くなったのは2005年ですが、その直前までお仕事をされてましたよね。未発表の作品などもスケッチブックに数多く残されている。

**古屋さん** 現在、ラフデザインやメモなどが書かれたスケッチブックを整理しているのですが、スケッチだけで30,000点ほどあるので、悪戦苦闘中です(笑)。スケッチブックは見ているだけでも面白いですよ。シュガーポットのデザインの横に「スプーンはどうする？」なんていう、森さんのデザインの苦悩が垣間見えます。

**向井さん** そうした多くの作品は今見ても楽しい。今後も森さんの遺産を様々な形で発信していくのが私たちの役割ですね。

合同会社森正洋デザイン研究所の取り組み

森正洋・美佐緒夫妻が保存していた作品、スケッチ、ノート、メモランダム、資料写真、その他の膨大な資料を整理し、森正洋アーカイブを構築することを目指している。森正洋氏のデザインをより多くの人々に届ける手助けをするともに、プロダクトデザイナーの地位向上へ貢献できればと願っている。森デザインに関する諸権利保全と運用及び展覧会などの許諾窓口として森正洋の作品と私たちを繋いでいる。

合同会社 森正洋デザイン研究所  
佐賀県嬉野市嬉野町大字下野丙1686



**向井 良久さん**  
税理士の仕事の傍ら、森さんのアトリエの保全、森正洋デザイン研究所の事務全般などに尽力。「趣味で陶芸を行っていましたが、一度私の作品を森さんにご覧いただきました。その感想は“素人の作品はいいねえ、邪念がなくて。”というものでした(笑)」



**筒井 泰彦さん**  
森正洋デザイン研究所の代表。筒井ガッコ堂のペンネームでエッセイストとしても活躍中で、雑誌「太陽」の編集部に在籍していた1970年代に森さんと出会う。



**井手 誠二郎さん**  
有田工業高校の教諭時代から森さんと親交を深めてきた。元有田歴史民俗資料館館長。海外から森さんに学ぼうと訪れた外国人たちにも熱心に指導する森さんの姿が忘れられないという。



**古屋 伸治さん**  
有田の岩尾磁器で陶壁の仕事を手掛けてきた。毎年陶器祭りの会場となる「波佐見やきもの公園」には森さんと一緒に仕事をした陶壁「陶磁の路」や「世界の窯」を見ることが出来る。



第1回グッドデザイン賞を受賞した「G型しょうゆさし」



森さんがデザインしたタンブラー